

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2010年 3月 54号



〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-2-24
JICA地球ひろば気付
カンボジア教育支援基金 事務局
TEL&FAX 048-431-5669(連絡先竹口)
<http://www.keaf-japan.com>

郵便振替口座

00150-1-558318 カンボジア教育支援基金

《第25回スタディツアー》

初めてのリーダーとして

KEAFスタディツアーリーダー
事務局員 岡本俊樹

今回3年振りのしかも、KEAF-Japanとして再出発後、念願の初のスタディツアーでした。それだけに感慨もひとしおでした。参加者は女性9名、男性1名の計10名でした。改めまして昨今の女性のパワーを目の当たりにした次第です。皆さんそれぞれに貧困、教育、孤児、地雷といったテーマを胸にカンボジアを訪問しました。中には「世界から地雷がなくなる事が私の夢です」と言う人もいました。参加者の多くが、行くまでのイメージと、行ってからの現実に対し少なからずギャップを感じられたようです。

どうぞ、そんな様子をご覧頂ければ幸いです。

【現地で実際に見た発展途上国】

会社員 榎本真人

日本を出国して約9時間後プノンペン空港を出て、さあカンボジア！第一印象「小バエが街灯にたかっているなあ〜」、僕にはやりたい事がある。それは、「世界の人々に夢と希望を与える環境を提供すること」。だけど海外には一度も行った事がない。だから自分の目で発展途上国という国を見てみたかった。プノンペンからスタートしたこのツアー、バスの中で僕は思わぬ光景を目にしていた。思っていた以上に町中には沢山のお店、家、ホテルが立ち並びTVとかで観たりする途上国のイメージとは違う。初日は、移動のみの行動でしたのでそんな気持ちで眠りにつきました。

そして翌日、バスでの移動でプノンペンを抜け始めるとすぐに景色が変わっていく。まず道路ではコンクリートがなくなっていく。車が通ると土埃りだらけで、お店はもはや滅多に見掛けない。家はほとんど木製、しかも崩れ落ちそうとこんな具合。

後に現地ガイドさんが言っていたが、どうやらカンボジアで栄えているように見えるのは、首都

プノンペンとアンコールワットのある観光地シェムリアップくらいらしい。

ツアーでは村の学校を訪ね学生達と交流、親しくしてくれた学生が自分の家を案内してくれた。近くでみると、失礼ながら「雨凌げるの？」と思った。その家は大半の日本人なら住みたくはないと思うであろう。電気、水道、ガスも通っていない、全く生活水準が違う。



だけど「僕もこの国に生まれたらきっとこういった暮らしをしているんだろうな」と思った。たまたま生まれた場所が違うだけで、やりたい事を諦めざるえをないような生活。もっとも、現地の人々には、それが当たり前となっていて、自分の環境が「恵まれていない」と感じていないのではと僕は思った。

彼らはとても友好的で勉強熱心だ、なにより笑顔が素敵だ。そんな姿を見ていると、この子たちに、なおさら働き口や教育でのチャンスの幅を広げてあげたいと強く思った。先進国に住んでいる僕らには、本人さえその気になれば色々な事を可能とできるチャンスがある。それってどんなに幸せな事なんだろう？「自分はこのままでいいの？」「もっともっと頑張らなくていいの？」と、そう考えさせられた旅行だった。



【選択肢が一つしかない子どもが、 百の選択肢をもてるように】

立命館大学 下山 茜

私がこのツアーに参加しようと思ったのは、「本当の貧困が知りたい」という目的があったからだった。大学に入り様々な講義を聞くうちに、「貧困国を救うのは、経済開発だ」という考えが間違いであることに気づき、「貧困とは何か」、「貧困国にとって本当の幸せとは何か」、「支援として我々は何をすべきか」ということを理解するきっかけが欲しいとも考えていた。実際にカンボジアに来てみて、私は驚いた。「本当にこれが貧困なの？」と思うくらい、至る所に笑顔があふれていた。村の学校や孤児院やゴミ山の子供達は勉強意欲が強く、夢と希望にあふれる輝いた瞳を持っていた。



旅を終えて、私はあらためて貧困について考えた。貧困とは、無意識のうちにイコール不幸と考えがちだけど、幸せというのは主観的なものであって、自分が幸せだと感じれば、幸せなのである。貧困国と呼ばれるカンボジアでも、皆笑顔で暮らしている。しかし、教育が不十分であったり、夢や希望を叶える手段を持たなかったりする子供がいるのも事実だ。だから私は少しでも、子供たちに選択肢が増えるようにしたい。具体的にはまだ分からないけれど、他の国に行ったり日本で活動したりして、実現していこうと思う。

今は、選択肢が一つしかない子供が、百の選択肢を持てるように、私は願う。

最後に、このような貴重な体験をさせてくれたKEAFに感謝したい。また、共に過ごした最高の仲間に出会わせてくれてありがとう。

【カンボジアの温かさに再度魅了】

東京外国語大学 趙 理睿

今回、私にとってカンボジアは2度目の訪問でした。普段見ないインターネットのページを偶然見ているとき、幸いにも今回のツアーに巡り合ったのです。

海外旅行に行くたび私は、現地の人と直接話をしたいと思うのですが、プロモルプロム学校を訪問したことで、カンボジア人の特徴を見ることができました。火熾しにもかかわらずさらっとやり遂げてしまうところ、いつもノートを持ち歩くほど勤勉な姿、日本語を一生懸命に話す子、飲み終えたペットボトルを学校の机に入れてしまうところまでカメラに収めたい新しい発見ばかりでした。

その中でも一番カメラに残っているのは、彼らの笑顔でした。最初、子供たちは緊張していたのか、なかなか打ち解けることができませんでした。しかし一緒に遊び、走り回っていると不思議と笑みがこぼれ、私たちを温かくしてくれるのでした。



今回のツアーは、前回個人で行ったカンボジアとはまた随分と印象が変わりました。しかし共通なのは、カンボジアの温かさに再度魅了されたことです。

次回のツアーが催行されるときには、ぜひまた参加したいと感じています。

【希望に溢れるカンボジアの学生】

國學院大學 川畑 美菜

私がこのツアーに参加した理由は、発展途上国の現状やボランティアのあり方を考える前に、まずは自分の目で見たかったからです。そして以前映画で見た世界遺産のアンコールワットにも興味があり、行くことを即決しました。



今回のツアーで農村の学校へ交流しにいたり、地雷博物館や、ゴミ山を見学したりとたくさんの経験をさせてもらいました。現地の中・高校生に日本の言葉や文化を教えてあげながらも、逆に私が彼らにいろんなことを教わった気がします。彼らは勉強したいという気持ちを強く持っていて、好きな教科や将来の夢について目を輝かせて話してくれました。今、自分たちのいる環境の中で可能性を最大限に発揮しようとしているし、そんな彼らの心は決して貧しくなく、希望に満ち溢れていました。日本の豊かさ、便利さを実感した旅でもありましたが、と同時に私を含め、勉強できる環境に恵まれていることに気づかない日本人は心が貧しいなと思ったのです。



そしてもうひとつ、感じたことがあります。私は持ってきたデジカメで日本の文化のひとつとして、着物や雪を見せて紹介すると、その周りには興味を持って集まって来た学生でいっぱいになりました。彼らは自分の国の誇りである世界遺産のアンコールワットはもちろん、首都のプノンペンにも行くことが難しいと後から聞き、複雑な気持ちになりました。観光に来る外国人の目に映るカンボジアを彼らは知らないままなのだと思うと、できることならぜひ実際に目で見て誇りを持ってほしいと思ったのです。留学や修学旅行のような機会です。いつか彼らが訪問できたらいいなと実感しました。

観光だけでは体験できないような農村地帯のカンボジアの学生と触れ合うことができ、本当に良かったなと思います。この貴重な機会を与えてくれてありがとうございました。

【カンボジアスタディツアーの感想】

法政大学 野々宮 悠喜

私がカンボジアで一番印象的だったのは、現地の子どもたちの笑顔でした。今回のカンボジア訪問は、私にとって初めてだったので、カンボジアという国に対するイメージはたくさんありました。以前から発展途上国支援には関心があり、実際に現地へ足を運び、自分の目で現状を確かめようと心に決めていました。日本で、メディアなどを通して想像していたことは厳しい現状の数々で、不安な気持ちもありました。しかし、カンボジアに到着してから、その不安も打ち消され、どこか安心した自分がいました。

現地の子どもたちと会話をしていると、みんな希望を持って日々勉強に励んでいて、自分の夢をうれしそうに、目をキラキラさせながら話す姿が忘れられません。教育は子どもたちの未来の可能性を広げる、ということが一番近くで実感しました。また、カンボジアには豊かな愛情が溢れていました。家族や友達、そして私たち日本人に対してもとても優しく接してくれて、カンボジア人のあたたかさを肌で感じることができました。日本の慌しく過ぎていく日常のなかでは気づくことができなかった、大切なことを思い出せたような気がします。



カンボジアでたくさんの人、そしてたくさん笑顔に出会うことができ本当に良かったです。またいつの日か再び現地を訪れ、人々の自立の支援をしていきたいです。今回、このような貴重な経験ができたのもKEAF・Japanのみなさん、そして一緒に旅をしてきた仲間たちのおかげです。本当にありがとうございました。カンボジア、オークン!!

【スタディツアーに参加して】

大学生 齋藤 佳恵

私がこのツアーに参加しようと思ったのは、内容にゴミ山見学があったから。カンボジアに興味があるからとか、現地の人と交流したいからという理由ではなく、単にゴミ山を“見たい”という好奇心からだった。

そんなことがきっかけだったから、二日目の学生との交流はとても不安だった。学校に着き、高校生と交流することになった。高校生に折り紙、ぜったいつまらないだろうと思いながら教えていた。しかし折り紙は意外と難しいようで、一生懸命折っていた。鶴や紙飛行機を一緒につくった。高校生の中には英語を話せる人もいて、話しかけてくれた。“日本から来たの？”とか“何歳なの？”“兄弟はいるの？”なんて会話をした。でも私が英語を話さなくて、うまくコミュニケーションをとれなかった。もどかしかった。



三日目も学校を訪問。学生と一緒にカレーを作った。大量の肉と野菜を切った！“サンキュー”くらいしか、ことばを発しなかったのに、学生たちと協力して作れた気がした。ことばを通じたコミュニケーションと、ことばでは伝わらないコミュニケーションを体験したように思う。

ゴミ山訪問は、予想以上にあっけないものだった。スケジュール通り、本当に外観を見るだけだったし、テレビで見たほどひどい様子でも、鼻が曲がるほどの臭いでもなかった。想像よりましなところではあった。実際にゴミ山を見てみて、CCH の子どもたちのことを思った。ゴミ拾いで生計を立てるたいへんさ、苦しさ。本当の彼ら、彼女らの気持ちは分からない。私は彼女らの笑顔を見て“強い”と思った。しかし本当に強いのだろうか、どんなに強そうに見えても、まだ子ども。もしまたカンボジアに行くことがあったら、ゴミ山の中を見てみたい。

このツアーに参加できて本当によかった。ガイドさんのひなちゃん、運転手さん、リーダー岡本さんはじめ、一緒に旅してくれたみんな。会えてよかった！ありがとう。

【スタディツアーを終えて】

東北大学 平山 瑞樹

1週間におよぶカンボジアスタディツアーを終えて、振り返ってみると、日本にいただけでは決して見ることも体験することもできなかったであろうことばかりであったように思い、本当に貴重な体験をさせていただいたと感謝の気持ちを深く感じます。この感想文だけでは書ききれないほど、いろいろなことを考えさせられる旅となりました。まず何よりも先に、毎日新聞旅行、そしてKEAF-JAPANの皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

多くの体験の中で、私にとって2日間のプロモルブルム中学校・高校での児童・生徒との交流は何よりも充実したものでした。実際に学校で子どもたちと話してみると、元気で明るい小学生、ちょっと大人になり、話しかけると照れ笑いをする中学生、そして多くの話を私にしてくれた高校生。日本の子どもと変わらない、同じだと感じました。特に高校生は、ノートを見せてもらって「 $\sin\theta$ 、 $\cos\theta$ 、 $\tan\theta$ 」とあり、「難しくて大変だ。」と苦笑いを見せました。テレビなどでよく「カンボジアの子どもは、勉強をしたいという強い意思に満ちている」といったことを聞きますが、実際に見てみると私たちと大きく変わらないと感じ、しかしそれは決して残念なことではなく、彼らにとって学校に行くこと、勉強をすることが当たり前のものとなっていることの結果といえることなので、私には喜ばしく感じました。その一方で、町で手を合わせてお金を求める物乞いの子どもも多く見ました。彼らの多くが学校に通っていないと聞き、学校に行けるから安定しているのか、安定しているから学校に行けるのか、どちらが先なのかは分かりませんが、子どもがみな学校に行くことができたらと思いました。この1週間で教育は平等に与えられるべきものであると実感させられました。

この旅を通して、私に何かできるかといっても何もできることはないかもしれませんが、しかし多くのもの見、体験をしたことは私の大切な財産となりました。改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【スタディツアーレポート】

大学生 斎藤 侑季

私がスタディツアーに参加しようと思ったきっかけは、自分の目で発展途上国を見て、今後の自分に何ができるか考えたかったからである。

今回、スタディツアーに参加して、色々な所を見て、色々な人と触れ合い、色々なことを考えさせられた。村の小・中・高校へ行ったり、孤児院へ行ったりして、たくさん子どもたちと関わった。みんな目がキラキラしていて、好奇心に満ち溢れていた。

日本はモノに満ち溢れているけれど、夢がない。カンボジアの子どもたちには、夢があった。モノの観点からいって、カンボジアは、日本に比べたら、貧しい生活をしているのは確かだと思う。だが、彼らはそれを不満に思っていない。むしろ、私は、日本の方が貧しいと思った。こんなにモノに満ち溢れ、豊かな生活をしているのに、心が満ちていない気がしたからである。何をしたいのか、自分で選ぶ道はいくらでもあるのに、樂することばかりを考え、結局本当にしたいことに辿り着けぬまま、過ごしている人が多いように思った。

事実、私もその一人であった。今、私は自分のやりたいことを思いっきりやっている。正直、この先、自分に何が出来るとかわからないが、今は、知識を増やすべき時なのだと思う。

今回、カンボジアへ行って『何が彼らのためになるのか』の問いにまだ答えが出せていない。しかし、色々な国の人々と話したいという思いが芽生えた。色々な国へ出向き、色々な人と会話をし、意見交換をしたい。様々な文化、価値観を取り入れ、自分の考えを導き出したいと思ったのだ。

今回、カンボジアで貴重な体験が出来た。これを今後活かしていく為にも、私はまだまだ考え、進み続けたいと思う。



ー カンボジア出張報告 ー

出張者・報告者 事務局員 竹口 素弘

期間 2010年2月23日(火)～3月6日(土)

目的・・支援校10校訪問、支援品支給及び打合せ
高校在学奨学生へ年度後半の奨学金支給
奨学生に関する合意の確認(高校・中学)
その他支援関係の打合せ・要望品の確認。
教科書・副教材関係の支援。教育調査。
会員の方からの支援品を各学校に支援。

【1】 奨学金支援

- (1) プロモルプロム高校 10～12年生 計57名
 - ・ 後半部分の奨学金の学校への委託 1140\$
 - ・ 奨学生選定基準等の合意書の交換
 - ・ 奨学生の出欠状況：4/1頃は、学校の先生の休み（結婚式への出席）が多い。遠方の生徒は、早めに連絡しないと休講が多いので欠席することが多い。（プレイヴェン州・スヴァイリエン州の悪しき習慣）プノンペンで教科書手配等の都合で、訪問日連絡が直前になり、57名の奨学生の中12名欠席した。
 - ・ バンティチャクライ、プレイトープ各中学校長推薦の奨学生は57名の内14名。
- (2) コンポントゥラバイ高校 10・11年生 計10名
 - ・ 後半部分の奨学金の学校への委託 200\$
 - ・ 奨学生への奨学金委託の合意書の交換
 - ・ プラティアート中学校長推薦の奨学生 10名。内1名は親族の結婚式で、早退。
 - ・ コンポントゥラバイ高校の生徒でも貧しい生徒がいるので、奨学金の支援をして欲しいとの要請があった。



コンポントゥラバイ高校奨学生 11・10年生

- (3) プレアンドウン高校 11年生 1名
 - ・ プレイトープ中学卒の奨学生 1名出席

- ・ 成績でクラス分けしており、優秀なクラスには試験を受けて合格した生徒が入る。ジェムピッチ君は試験に合格し優秀クラスに入った。前のクラスでは4/37であったが現在は中位の成績。
- ・ プレアンドゥン高校の生徒で貧困な生徒がいるので奨学金の支援をして欲しいとの要請があった。

〔2〕 教科書及び副教材・運動用品などの支援

教科書支援、副教材・運動用品の支援に対して、大竹財団より助成金が認められたので、支援のKEAF 及び申請計画に基づいて、発注し各学校に届けた。



教科書の購入、搬送



学校に教科書支援

(1) 教科書 下記は、各学校と打合せし、出された要望に沿って、今回支援した内容。

- ① アンサー小学校：5・6年 クメール語、数学、科学 177 冊
 - ② プロモルプロム小学校：3・5・6年 クメール語、教師用各科目 208 冊
 - ③ プレイトープ小学校：1年 数学、社会 120 冊
 - ④ プレイトープ中学校：8・9年 英語 100 冊
 - ⑤ バンティチャクライ中学校：7年 英語 40 冊
 - ⑥ プラティアート中学校：7年 クメール語、8年 数学 130 冊
 - ⑦ プロモルプロム高校：7ー12年 各教科 620 冊
 - ⑧ コンポントウラバイ高校：10年 数学、物理、科学、生物 252 冊
 - ⑨ プレアンドゥン高校：11年 数学、物理、化学、生物 250 冊
- 支援合計 1897 冊 1980 ドル

(2) 副教材・運動用品 各学校の必要とするもので、支援品として適切なものを順次支援。

絵・クメール文字カード、クレヨン、ボールペン、絵本、物語、黒板用定規セット、地図、辞書、拡声器、A4 用紙など

(3) 会員・支援者からの寄贈品

ノートパソコン(XP)：プレイトープ中学

ミニノートパソコン(XP)：プロモルプロム中学

デジタルカメラ：コンポントウラバイ高校

絵本・絵手紙・リコーダー：プロモルプロム小学校

組立天体望遠鏡キット：プロモルブルム高校、
プラティアート中学



プレイトープ中学：ノートパソコン



プロモルプロム中学：ミニノートパソコン



コンポントウラバイ高校：デジカメ



プロモルプロム高校：天体望遠鏡

[3] 教育関係調査

(1) 高校教員養成学校

- ・ 大学卒業後入学試験に合格すれば、半年研修を受けて、高校教師の資格が得られる。
- ・ 12 年卒業資格を得た後、試験を受け合格すれば、2 年間の就学で高校教師の資格が得られる。但し、プレイヴェン市にある学校にプレイヴェン州、スヴァイリエン州から希望者が来るので試験は難しい。

(2) 中学・小学の各教師養成学校

- ・ プレイヴェン市以外にも何箇所がある。
- ・ 以前は 11 年迄でも、入学可能であったが、現在は 12 年卒業資格を得てから、入学するのが普通になっている。

(3) 図書館・図書室・ライブラリに関して

- ・ 図書室のある学校は非常に少なく、KEAF の支援校では、プレアンドゥン高校とコンボントゥラバイ高校にある。友好学園にもある。
- ・ プロモルプロム校は、図書室と称する場所はあるが、実質的には、学校の書籍・備品保管倉庫の状態である。
- ・ 図書室は無いが、教科書以外にも、カンボジアの伝統、歴史、宗教、倫理などの書籍を備える事を希望する学校が多い。

(4) 各学校生徒数の調査 2009 年 1 月→2010 年 2 月

- | | |
|-----------------|-------------|
| ① アンサー小学校： | 336→326 人 |
| ② プロモルプロム小学校： | 455→436 人 |
| ③ ソンポン小学校： | 595→548 人 |
| ④ プレイトプ小学校： | 785→未確認 |
| ⑤ プレイトプ中学校： | 273→336 人 |
| ⑥ バンティチャクライ中学校： | 346→404 人 |
| ⑦ プラティアート中学校： | 433→423 人 |
| ⑧ プロモルプロム高校： | 1012→1145 人 |

年度毎、各学校、各学年の生徒数の推移は、今後分析の予定。

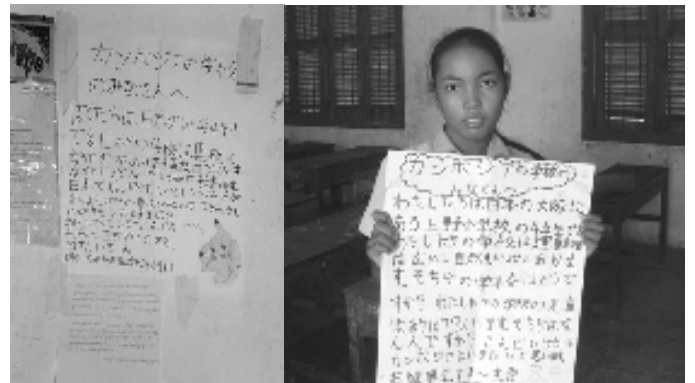
[4] 小学校の交流

大阪の上野小学校・国際理解教育推進校

生徒の絵手紙で、カンボジアの小学校との交流を希望され、絵手紙を託される。

絵手紙 6 通・A2 サイズ用紙に絵とメッセージ
メッセージはクメール語に翻訳しプロモルプロム小学校に届ける。

アンサー小学校、プロモルプロム小学校より
日本の小学校への絵手紙受領(作成 3-4 年生)



上野小学校からの絵手紙



プロモルプロム小学校、アンサー小学校生徒の絵手紙

[5] 奨学生紹介&メッセージ

① リムソッカリ コンボントゥラバイ高校 11 年



[プロフィール]

プラティアート中学卒、6 人家族、4 人姉妹の長女、次女は 5 年生で中退、三女は 5 年生、四女は 4 才
両親は農家、田圃は 2ha、休日は家の手伝い。

家から通学、自転車が無いので、友人のバイクに同乗させてもらっている。

[メッセージ]

奨学金を貰う前は、本や定規などが買えなく、塾にも行けなかったなので、自分で勉強していました。

学校の成績は、中学の時は良かった(1/35 人)のですが、高校では、優秀な生徒が多いので、成績が中ぐらいになりました。もっと勉強を頑張って、大学に進学し、医者になりたいと思っています。家が貧しいので、大学に行くのは難しいかもしれません。

楽しみは、バスケットボールを教えてもらっていることと友達とバレーボールをすることです。

② ジェムピッチ プレアンドウン高校 11 年



[プロフィール]

プレイトープ中学卒、3 人兄弟、長男、2 番目(女)は 8 年で中退、3 番目(男)は 8 年生、寺に寄宿、学校まで自転車で 8 分、両親は農家、田圃は 1ha。

[メッセージ]

私はプレアンドウン高校の学生のジェムピッチと申します。支援して頂いて真心から感謝します。奨学金を戴いて生活と勉強の状況は前より良くなっています。これからももっと勉強を頑張りたいと思います。そして、道徳的に立派な人になり、社会活動に参加するつもりです。

家族の生活状況は変わりませんが、支援者の皆様のおかげで、私は勉強を続けることが出来ます。頑張って勉強し、私の家族と社会全体を支えることができるようになりたいと思います。最後に支援者の皆様に、幸せ・ご成功をお祈り申し上げます。

③ ブラックティン コンポントゥラバイ高校 10 年



[プロフィール]

プラティアート中学卒、6 人兄弟、6 番目、2-3 番目は結婚、4・5 番目はプノンペンで仕事、1 番目の長女・両親と同居、自転車で 40 分、両親は農家、1ha、休日は家の手伝いや友達と勉強。

[メッセージ]

私の兄弟は 8 人で、私は 6 番目です。家は貧しいので、勉強を続けるのは難しいです。でも、私の勉強するという意志は変わりません。もっと頑張りたいと思っています。現在、プレイヴェン州のコンポントゥラバイ高校で勉強しています。私のクラスは 44 人います。奨学金を戴いて勉強と生活は前より良くなっています。この支援は、ずっと続けて戴きたいと思っております。

④ ポーイサマール コンポントゥラバイ高校 11 年



[プロフィール]

プラティアート中学卒、6 人兄弟、6 番目、上 3 人は結婚して別居、2 番目の姉・両親と同居、自転車で 30 分、両親は農家、2ha、休日は家の手伝いと勉強、英語の先生になるのが希望。

[メッセージ]

私は、日本の支援者の皆様に心から感謝申し上げます。奨学金を頂いて、言葉がいえないほど大変嬉しいです。私はもっと頑張りたいと約束します。支援者の皆様が、常に幸せになるようにお祈り申し上げます。



カンボジアでワークキャンプを行なって

FWC/KEAF 事務局員 児玉 裕史

はじめてのワークキャンプ

1月29日から2月22日までに私はカンボジアに滞在した。目的は私が日本語教師をしていたプロモプロム校でのワークキャンプである。ワークキャンプとは現地で合宿生活しながら行なうボランティアの形式である。

キャンプの始まり

キャンプはmixiや友人を中心に声をかけた。最終的に私を含め、3人のキャンパーでの出発となった。

今回、カンボジア滞在、23日間のうち、そのほとんどをプサートリアで過ごした。

カンボジアの朝は早い。7時には学校が始まり、2時間の昼休みを経て、13時からまた授業が再開される。私が日本語教師をし、今回ワークキャンプを行なったプロモプロム中・高校は、現在、12年生（高校3年生）は終日授業があるものの、7年（中学1年）～11年（高校2年）生は、午前か午後、どちらかの半日授業である。いわゆる二部授業の体制をとっている。

そうした中で、私たちのワークは、音楽の授業をすることだった。日本で購入した電子ピアノを村に持ち込んだ。カンボジアではご存知のように、いまだに教育環境が整ったとは言えない。学校・教室不足、教師不足、教科書不足、教材不足。急激に増加する子どもの数に対し、また教育インフラが追いついていない。

こうした中では、どうしても試験科目に資源が集中し、文化的な科目（美術、音楽、体育）があまり行なわれていない。田舎の学校では特に顕著な傾向で、プロモプロムで音楽の授業は行なわれていない。無論、音楽教師も教材もない。

私が日本語教師をしていたときに、生徒からのリクエストが多かったのは、日本の歌である。「先生、日本の歌を教えてください」、「歌ってください」とよく言われた。時間に余裕があると、歌詞を書いてアカペラで歌ってはみたが、それは日本語の授業であり、音楽の授業とは言いがたかった

音楽の授業の難しさ喜び

私たちにとって意外だったのは、生徒や先生がいくつもの日本語の曲を知っていたことだった。私がハミングしていた曲を知っているとされたことも

ある。これは、テレビやラジオの影響もあるが、友好学園の先生は歴代の日本語教師やスタディーツアーなどの訪問者から聞いたそうだ。そうした曲の中から、生徒が歌えそうなものや生徒の希望を聞き、選曲し、音楽を教えていった。「上を向いて歩こう」、「さくら（独唱）/森山直太朗」、「幸せなら手をたたこう」が主に練習した曲である。時間割に余裕がある12年生を中心に音楽の授業を行なった。しかし、音楽の授業がない彼らに日本の歌を教えるのは思った以上に難しいことだった。



『1分程度の歌を覚えるのに何日もかかった。何度歌っても彼らに音程は伝わらず、みんな自己流で勝手に音程を作って歌う。もはや作曲状態。苦笑いしながら、でも私はこれでいいと思っていた。』

板書した歌詞をノートに書き、生徒は目を輝かせながら一生懸命歌っていた。私のクメール語みたいだなと思った。うまく話すのでなく、伝えたいという想いが優先。音楽の授業がないことがもったいないくらい生徒は歌が好きだったし、その歌は何かを切実に伝えようとしていた。音楽の授業の中で、私たちは日本語の歌を教え、生徒からはカンボジアの歌を教えてもらった。』（キャンプ日記より、筆者はピアノで伴奏していた岸川さん）

初めて、通して全部歌えた時には、生徒もその自負があったのだろう、自然と拍手が生まれ、生徒の顔はくしゃくしゃに笑っていた。こちらも清々しい気持ちになった。もう残り3日というときに、放課後の教室から、生徒のくちずさむ「上を向いて歩こう」が聞こえたとき、僕は泣きそうになった。自分がしてきたことが、少しずつつながっていく手ごたえを感じられたからだ。

学校をあとにして1ヶ月が経つ。私は、カンボジアに行ったキャンパーと「来年、また行きたいね」と話をしている。もうすぐ、大学の卒業式を迎え、就職する。私はもう行かれないかもしれない。けれど、今回のキャンプをみんなと次につないでいくことはできるのだ。

ありがとうございました。(2009年12月1日～2010年3月12日)

年会費、寄付金、奨学金をお振込頂きました方々に心からお礼申し上げます。(敬称略)

個人情報保護のため非表示

【かえで大学生奨学金基金】

支援者の方の募金で、大学進学希望者への奨学金支援を行うことになりました。KEAFでは、高校生への奨学金を、現在68人に支援しています。プサートリア(村)では、バイク通学の生徒がいる反面、自転車も買えない生徒もいます。

【支援品のお礼】

パソコン・デジカメなど、教育現場に必要とする物のご支援ありがとうございました。(敬称略)
パソコン:越智 直樹(東京)・鈴木 あゆみ(東京)
デジカメ:中嶋 友晴(東京)
リコーダー&絵本:上野小学校 門脇先生(大阪)
組立式天体望遠鏡:三鷹天文台



リコーダーって、初めて、難しい!

【お願い】

各学校からコンピューターやデジカメの支援要望があります。買い替えなどで使用していないものが手元にありましたら、ご支援をお願いします。

【ボランティアのお願い】

カンボジア教育支援基金の活動をお手伝いいただける方、ご連絡ください。

1. カンボジア通信の発行時に、編集作業、宛名シールの作成などをパソコンで行います。
2. イベント企画の好きな方。
3. カンボジアの生徒の感想文など、翻訳の手伝いをしていただける方。(クメール語)
4. カンボジア通信の発送作業は、宛名シール貼り、差込、封入、封の糊付けなど、簡単な作業を7-8人で雑談をしながら行います。関心のある方、ぜひご参加ください。

連絡先: 電話・FAX 048-431-5669

keafjapan@yahoo.co.jp 事務局 竹口素弘



プロモルプロム小・スタツアのお姉さんと